

4月10日(日)、埼玉・群馬支部合同見学会-彦部家住宅・桐生新町重要伝統的建造物群保存地区の見学会が、11人(埼玉7人、群馬4人)の参加で行われました。埼玉支部一行は、開始時間の10時より30分程早く集合し、長屋門の前で、館長の奥さんと立ち話をしたり、又館長の奥さんの許可を得て、開始前の敷地内の散策をしたりして、開始時間の10時を迎えました。その頃、群馬支部の一行が来て、ボランティアガイド-横川さんによる、案内説明がされました。(ガイドによる説明、パンフレット、彦部家屋敷の冊子、ネットからの資料を参照)

## 1.彦部家

重要文化財の指定を受けている彦部家住宅は、群馬県桐生市の東南の広沢町・渡良瀬川右岸に位置しています。屋敷地は20,607m<sup>2</sup>で、地域指定を受けており、内4,000m<sup>2</sup>が竹林となっている。敷地西側に連なる手白山の麓を利用した東西130m、南北160mの、広さとなっており、又、その中の100m四方の部分が、塙と土塁で囲まれた内郭となっている中世の武士の館である。

主屋、長屋門、冬住み、文庫蔵、穀蔵の重要文化財(江戸時代建立)が建てられている他、12世紀-平安末期に源義国が石清水八幡宮より勧請と言い伝えられている竹ガ岡八幡宮が敷地西にある。北隅の土塁を一段高した櫓台跡や、又その脇には、江戸末期建立石垣の搦め手口がある。

それから、江戸後期から織物業を営んできた彦部家は、大正時代に女工の寄宿舎や、医務所を残している。これらは、平成24年にぐんま絹遺産登録されている。

彦部家の歴史は、かなり古く、7世紀後半の天武天皇の皇子高市親王を祖とする1300年以上続く旧家の中の旧家である。文庫蔵の由緒、系図(高階朝臣彦部家家譜)に記載されている。現在の当主は、49代彦部篤夫さんで、この館長をつとめている。彼は、今から10年前の平成18年に、上毛新聞に「桐生織物と彦部家」の題で、投稿している。群馬大学大学院工学研究科卒業後、三洋電機に31年勤務し、平成17年に退職して、現在全国重文民家の集い常任幹事を務めている。翌年父君の48代敏郎さんが亡くなっている。

平安初期、6代目に、高階真人姓を賜与され、皇族から臣下に降った。11代敏忠の時、高階朝臣姓、21代光朝の時(平安末期)、彦部姓初代を名乗る。室町時代に入って、25代光晴の頃から、足利将軍家の暑い信頼を得る。27代忠春は3代将軍義満から、金閣寺の作事奉行を命じられ、建立に関わっている。31代晴直の時、天文17年(1548)将軍義輝の寵姫小侍従から仁田山紬の織物発注書が届いている。33代信勝の時室町末期の永禄4年(1561)、京都から、桐生に来住し、太田金山城手由良成繁から、広沢のこの地を賜り、屋敷を構えた。

江戸時代に帰農し、染織は続けられていました。19世紀前半の文政・天保年間、42代知行は、機業の優秀な工場として、幕府が視察に来るほど桐生織物隆盛に貢献しました。黒繻子染め技法を発明しました。

明治に入って、本格的に織物業を営み、46代駒雄は、桐生織物同業組合の組合長を務めました。

建物については、まず長屋門がある。間口16.2m、奥行3.774m 潜り門を備えた、両開きの門扉となっている。寄棟造りの茅葺き屋根。主屋よりやや新しい年代の建立とされている17世紀中頃。妻側から裏側1間が大壁で、仕上げられ、柱は、手斧で仕上げている。

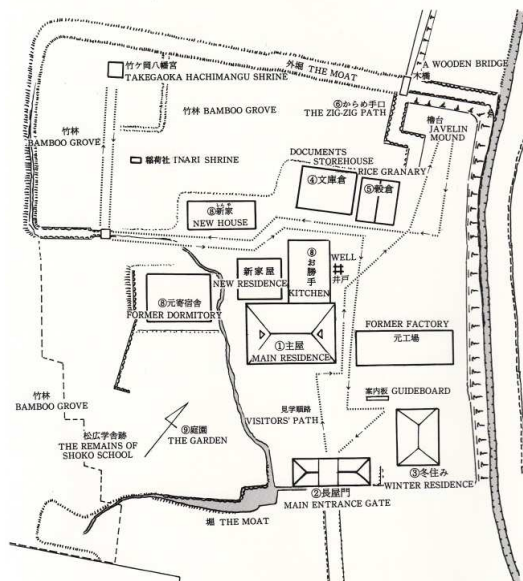


### 彦部家屋敷

#### THE HIKOBE MANOR

国指定重要文化財

THE HIKOBE MANOR, A NATIONAL IMPORTANT CULTURAL ASSETS



長屋門



冬住み



穀蔵



文庫蔵





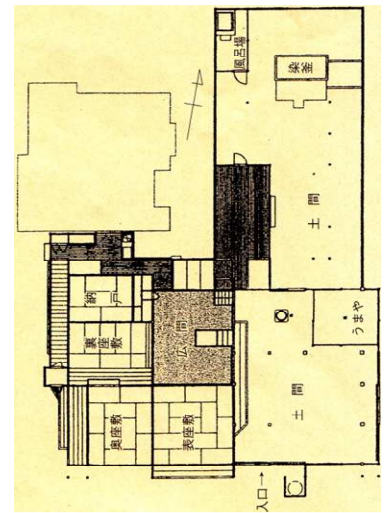
冬住み(隠居屋)は敷地の東端に位置し、開口部が南側前庭の大きな空気を挟んである。間口7.54m、奥行5.325m、寄棟造りの茅葺きで、6畳と8畳の二間あり、その間の3尺の廊下が南と西をめぐっている。書院風の間取りで、18世紀中頃の建立。

尚、玄関左側に間口2.895mの瓦葺きの下屋がついている。主屋の北側隣接に、**文庫蔵**、**穀蔵**がある。文庫蔵は、間口10.914m、奥行4.66m、平入2階建て。中世から近世にかけての文書多数保存されている。中央が仕切られていて、2室となっています。前庇付き。19世紀初頭の建立。

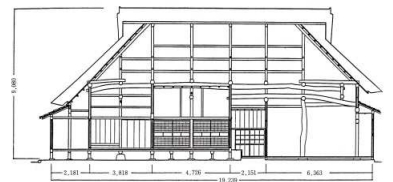
穀蔵は間口3.76m、奥行9.366mで、妻入り前庇がついている。19世紀初頭の建立。

**主屋**は、間口18m、奥行11mで、入母屋造り、茅葺き。内部構成は、正面から見て、右半分は作業空間、左半分が居室群になっている。作業空間は、北のコーナーに馬屋がある広い土間で、居室群は南北奥に3室2列の大阪、奈良に見られる17世紀の古民家の特徴を持っている。中でも、南側の表座敷、奥座敷です。奥座敷は、10畳敷、竿縁天井、四周に内法長押、北壁面西よりに、奥行30cm程の床の間がある。この床の間は落とし掛けがなく、床框がやや高い位置にあって、堅板壁としている。又、この座敷が特異なのは、南側に壁があり、西側に吐き出しの開口が広縁をとおして存在することです。足利将軍家と強い繋がりがある、彦部家は、入口右脇の半ば開放的な便所と、関係して、重要人物との密談が行われたのではとの憶測されている。開かれた南側に開口をとると、敵に狙われて、命を落とす危険があったといわれている。東隣の表座敷は、12畳半の室で、上屋部分に簀子天井、下屋部分が屋根裏表しとなっている。

解体修理は、主屋にあっては、平成7年10月から平成10年6月まで、このあと、冬住み、長屋門、文庫蔵、穀蔵が行われ、平成12年12月に完了しました。このなかで、主屋の建立年代が特定されました。それは、放射性炭素C14による年代測定です。炭素原子に含まれる質量数14の $^{14}\text{C}$ が大気に含まれている炭素の内、1兆分に1含まれている。これが、半減期が5730年の放射壊変で、ゆっくり、窒素原子に戻る。樹木が生きていた瞬間までの測定が可能。伐採した瞬間まで。3年の乾燥養生期間をみて、1580年(天正12年)建立、今から実に436年前の安土桃山時代です。



主屋平面図



桁行断面図



見学会開始・館長ほか挨拶

仁田山紬掲示板にて



外部より主屋奥座敷を見?

主屋南面



見学会のまとめ1

見学会のまとめ2

## 2. 桐生新町重要伝統的建造物群保存地区

彦部邸の見学が終わって、11人の見学御一行は、相生町にある、「志多美屋」で、全員ソースカツ丼に舌包みをうちました。本当は天満宮近くの創業125年の老舗「藤屋本店」で、食事する予定が満員との情報が入り、変更しました。ここは、ソースカツ丼とひもかわが食べられる所です。天満宮13:30集合で、そこには、ボランティアの説明員さんと、桐生市観光課の新人女性が待機していました。

天満宮を起点とし、南北に走る本町通り沿い800m位までの町並みを見学し、1時間半程で南端の有輪館へ。そして、ペーカリーカフェにて解散となりました。

指定エリアは東西230m、南北820mの13.4ha、本町1丁目、2丁目の全域、天神町1丁目の一部が指定されている。

天正19年(1591)徳川家康の命を受けた大久保長安の手代大野八衛門により町立てされ、当時から生産され、絹織物を中心に発展した町の形態として、江戸後期から昭和初期に建てられた建物が歴史あるものとして、今日に伝えられています。



エリア図

